ChocolateDragon

珈琲屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣｈｏｃｏｌａｔｅＤｒａｇｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ６７５７Ｉ

【作者名】
珈琲屋

【あらすじ】
魔術師の最高位である“７つ星”の少年、真堂朝輝（しんどうともき）は、ある日クラスメートの一般人、九条沙也加（くじょうさやか）と供にとある呪いをかけられ、殺し合い（ゲーム）に強制参加させられてしまう。
過去に過ちを犯した少年は、１人の少女を守るために命を懸けることを誓い、今まで何の力もない、ただの人間だった少女は強くなる事を誓った。

しかしそれは本当に命懸けのゲームであった…

特殊な“呪い”により、ほとんどの力を失った魔術師の少年と、その“呪い”によって突然強大な力を手に入れた普通の少女の戦いが始まる。

―序章―（前書き）

ＣｈｏｃｏｌａｔｅＤｒａｇｏｎ始まりですｍ（＿＿）ｍ

―序章―

全てが血にまみれていた。
鉤爪と牙に裂かれ、尾で粉砕され、炎に焦がされた死体が無惨な姿を晒して散乱している。
そんな“赤”にまみれた世界の中心に、“白”い恐怖が君臨していた。
恐ろしく凶暴な雄叫びをあげ、血生臭い空気をビリビリと震わせる。

勝者は彼。
そして罪人も。
6人の天使でさえ、激昂した彼を止める事ができなかった。

しかし、この死地に1人生存者がいた。
物陰に身を隠した生存者は震えていた。
しかし、それは恐怖によるものではない。
「これが…これが恐怖か…これが力なのか…見つけたぞ…絶対的なモノを…手に入れてやる…この“恐怖”と“力”を…天使になれないならば堕天使に…神になれないならば魔王に…異端の中の異端を極めようぞ…。待っていろ…人の為に嘆き、苦しむことのできる“優しき白き竜”よ。私はお前を打ち倒す。お前は“善”であり、“悪”ではないのだ。されば私が“完全なる悪”となろう…お前が“完全なる善”になる時に」

そうして、“竜”を激昂させこの血まみれの惨事を引き起こした生存者はそう誓いを立てた。

第1章第1節　白炎の魔術　―真堂朝輝―（前書き）

感想、ご意見、お待ちしておりますm（＿＿）m

第1章第1節　白炎の魔術　―真堂朝輝―

東京湾沿岸の倉庫地帯。

その一画にある、使われなくなった廃倉庫の中で、白い炎の剣を持った少年が自分より遥かに巨大なモノと対峙していた。

鬼、である。

しかもそこいらの鬼ではない。焦げ茶色の硬い肌に複数の角、複数の目、異様に太くて長い腕、がっしりとした体格。かの大蛇、ヤマタノオロチの息子と言われる酒呑童子であった。

「すぐに楽にしてやるよ」

そんな異形の化け物相手に、白い炎の剣を持った少年　―真堂朝輝―　が、平時は柔和である表情を、狂喜に引き裂けるような笑みに変えて宣言した。

ズザッ！！　と言う音とともに、朝輝が身を捻り、今まさに木の幹のような腕を振り回してきた鬼に斬りかかった。

隠し剣からの逆袈裟。

「グッゴォォォォォ！！」

力任せに振り回した腕を、二の腕の辺りからスッパリと綺麗に切断された鬼が叫ぶ。

ジュウッ、と鬼の肉が焦げる音とイヤな臭いがした。
朝輝は即座に逆袈裟で斬り上げた刃を翻し、痛みに呻く鬼の足元に殺到。
ズパッ！！
真横から、空気を断つような鋭い一閃。
その一閃は腕より太い脚をいとも容易く両断した。
「しまいだ。酒呑童子も案外あっけなかったな。拍子抜けだったよ」
ホコリっぽい倉庫の床に、片足を失った鬼の巨体がどうっと倒れる。

そして、倒れた鬼の首に無慈悲な刃が振り下ろされた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふぅ～、任務管理」
朝輝が1人言を呟くと同時に、鬼を葬った刃が右手から溶けるように消失した。
短くもなく、長くもない黒い髪を手でちょっとクシャっとして、朝輝が振り返る。
「終わったぞ、喜屋弟」
暗い倉庫に積まれたコンテナの前に倒れた人影に言う。

「ま…マジっすか…せっかくのデビュー戦だったのに…」

「まぁ…お前の心が折れてない限り次があるさ」

鬼に吹っ飛ばされた所為で倒れているのは喜屋雅幸という、短髪でスポーティーな感じの陰陽師の少年だった。

彼は、学校においては朝輝の後輩。

〈国際魔術連盟日本支部　悪魔・魔物討伐課〉においては朝輝の部下にあたる関係である。

「勉強になった？」

「あ…はい…」

実のところ凄すぎて参考になりませんでした。はい。

しかしこれが7つ星か…。

雅幸は見せつけられた力の差に愕然としていた。

なんと言っても、世界に7人しかいないわけで、その貴重な7つ星の戦闘を生で見ることが出来たのだから幸運である。

「大丈夫か？」

朝輝が倒れている雅幸の隣に膝を着いて話しかけた。

その顔は先ほどの凶暴なものから、何時も通りのちょっぴり垂れ目がちで柔和な顔に戻っていた。

「なんとか…あぁ、肉体よりも精神のダメージのがデカいかも…」

「そうか。悪いけど僕は治癒魔術は使えないから。でももう回収班が来るでしょう」

噂をすればなんとやらで、その回収班が倉庫の中に突入してきた。

「任務お疲れ様です。真堂課長」

慇懃に挨拶してきた隠蔽課　―魔術的な事故や事件を一般に知られない為に証拠を隠滅する課―　の職員に簡単に状況を伝える。

雅幸が救護班に回収されて行ったのを見届けた朝輝は、今回の鬼討伐作戦の本部に戻ることにした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

〈朝輝が去った後の倉庫〉

そこでは、物品の回収や、破壊された物の修復が行われ、鬼の死体の回収も始まっていた。

「なんてこった…」

職員の1人が呟く。

倉庫の床には、首を跳ねられ、右腕と右足を失った巨大な鬼の死体が仰臥していた。

「これが7つ星か…」

「謹慎中で力を制限されているってのにこの力…」

恐ろしい。
うらやましい。
頼もしい。

いろんな感情が入り混じった言葉が呟かれた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あぁ…眠いなぁ。

7月22日。時刻は既に深夜2時を過ぎていた。

朝輝は眠くてフラフラしながら、静かな暗い倉庫地帯を本部に向けて歩いている。

それにしても夜中だというのに蒸し暑い。

もう夏休みか…

朝輝がボーっとそんな事を考えていた時であった。

前方の暗闇から微かに、トッ　という足音が聞こえた。

「ん？」

誰だろうか。

一瞬、朝輝のお目付役である黒江白雪かと思ったが、それは色によって否定された。

暗闇からスッと出てきたのは真っ白い少女である。

まるでその闇を裂くかのような存在。

「…こんな所まで何の用？異端審問官様」

「私は私の仕事を全うしているだけ」

白い髪に白い肌に白い服のクラスメイトは、サファイアのような瞳を暑苦しい暗闇の中で煌めかせながら言う。

「異端審問官も大変だこと」

私怨でもあるのだろうか？

異様に追いかけてくる少女である。

「もうすぐ貴方の呪縛が解けるはず」

白い少女は感情を覗かせない声で言う。

「呪縛が解け、貴方が少しでも隙を見せたら私は貴方を捕らえて裁く。それが私の仕事だから」

仕事だからっていいながらこれは絶対私怨だよな〜

朝輝は彼女のサファイアの瞳を見つめながら思った。

しかし綺麗な瞳だ。

命が宿っている分、本物のサファイアよりも儚く美しいのかも知れない。

「もし仮に隙を見せたとしても」

言いながら朝輝は彼女に近づいて行く。

「教会の異端審問官如きに捕まるほど、このＣｈｏｃｏｌａｔｅＤｒａｇｏｎも落ちぶれちゃいないからさ」

朝輝と彼女は至近距離で見つめあった。

このちびっこい異端審問官はイギリス出身らしい。

「私も、たかが魔術師風情にやられる気はない」

例え７つ星の〈ウリエル〉だろうとも。

最後にそう付け加えた。

本当に強い娘だな。

自分が２年前に何をしたか知ってるのに、臆せずに正面から立ち向かってくる。

そんな彼女の態度に、朝輝は思わずはふっと笑ってしまった。

「竜が笑うな気持ち悪い」

厳しいね。

と朝輝がさらに笑った時、

「シェリー・ゴールドスミス」

涼やかな声が横合いから聞こえた。

スルリと、まるでそこにある闇自体が人の形を成して出てきたかのような人物であった。

黒くて長いポニーテールに、黒いスーツ、黒い革靴。

総てが黒いため、対象に白磁のような肌が目立ち、まるで顔と手だけ闇に浮いているようであった。

彼女、黒江白雪がその切れ長な目をスッと細め、異端審問官シェリー・ゴールドスミスを睨むように見ていた。

「去りなさい」

言われなくても、

そう言って異端審問官はふっと消えた。

「お疲れ様です。朝輝様」

「久しぶりの実戦だったから疲れた…」

「江原部長が怒っていましたよ」

「あぁ〜…」

心当たりアリアリだった。

今回の任務、実はかなりの大人数戦の予定だったのだが、朝輝が部長のいない所で勝手に作戦変更し、無理やり着いてきた喜屋雅幸と２人で突撃をかましたのだ。

実は朝輝と雅幸は鬼と戦う前に、鬼を使役していた陰陽道結社〈白鷺〉の陰陽師総勢４３人とやりあって（ほぼ朝輝が）壊滅させていた。

その上、鬼もである。

そんな無謀な所業を可能にしたのはやはり７つ星という化け物じみた朝輝の強さだからこそである。

「まったく…無茶をなさる」

白雪が珍しく感情を表していた。

「う…ごめんなさい」

久しぶりの実戦で愉しくなってしまったから、なんて言えない…

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その後、部長にコッテリ絞られた朝輝は、白雪の運転するベントレーで自宅へ向かっていた。

「ん？」

高校生らしくケータイをいじっていた朝輝が声をあげた。
着信１３件
メール２３件
内、どちらも１件以外同じ人物によるものであった。
「うぅ…」
あのお嬢さまは苦手だ。
いつデートして下さるんですの？
私との正式なお付き合いについて返事を伺いたいですわ。
何時も何時もそればかりである。
はぁ～…これってもはやストーk…
後の１件は、喜屋雅幸の姉で、朝輝のクラスメイト。
リアル魔女っ娘の喜屋美香からであった。
内容は、弟の戦績報告の催促と…
「なんでだ？」
思わず口にしたが、白雪は気にしていないようであった。
書かれていたのは、明後日　―　日付が変わったから正確には明日
―　に、美香の親友である九条沙也香と一緒に朝輝の家に遊びに

行く。
と言う内容であった。
朝輝に拒否権はないらしい…
しかし…わからない。
連盟の仕事関係で美香が来るのはわかる。
しかし、一般人である九条沙也香を伴って、と言うのがわからない。
しかも九条沙也香は…。
朝輝は、やたら肌が色が白く、黒髪が美しい少女の姿を思い浮かべた。
その姿はやたら鮮明に脳内で再生される。
血の匂いと、激しい後悔と共に…
「美香は“彼女を見たことがある”はずなのに…」
今度の独り言に、白雪は思わずバックミラーで朝輝を見た。

第1章第1節　白炎の魔術　―真堂朝輝―（後書き）

これからも頑張りますので、何卒よろしくお願いいたしますm（＿）m

間章　―ホムンクルスとサタン―（前書き）

間章では過去にふれて行きます。

間章　―ホムンクルスとサタン―

“彼”は複雑な思いで“それ”を見ていた。
実験コード〈ホムンクルス〉
“それ”は大きな水槽の中に浮いていた。
「感想は？」
と、白衣を着た女性が“彼”に話しかける。
しかし“彼”は水槽の中に浮く“それ”を見つめたまま返事をしない。
「〈自分〉が作られるのをリアルタイムで見るのはどんな気分？」
と、白衣の女性が再度問いかける。
女性は優しく微笑んでいたが、微笑んでいる理由は想像できるものではなかった。
「こんなモノを作ってどうする気ですか？」
“彼”が非難するような口調で白衣の女性問う。
「少なくとも、これであなたは不死身になったわ」
白衣の女性は思わず、引き裂けるような笑みを浮かべた。
「…なかなか不愉快ですよ？」
と“彼”は顔をしかめた。
ここは彼女の研究所。
そして“彼”が産まれた場所。

その研究所からたいして離れていない廃屋の地下。
床に複雑精緻な魔法円がいくつも描かれている。　召還用ではなく、身を守るもの。
そのうち1番大きな魔法円の真ん中で、ある宝石が割られた。
綺麗に４つに割られた宝石は美しいダイヤモンド。

しかし、そのダイヤモンドの中心は、まるで病魔に犯されているかのように黒い。
４つに割られ、黒い断面から煙りが上がっている。
それを見守っているのは大勢の魔術師たち。そして、魔術師たちは声を揃えて詠唱し始めた。
断面から上がっていた煙りが不意に止まり、ダイヤが不自然に震え、光った。
やがてそれもおさまり、詠唱も完結する。
完成したのだ。
彼らが求めるモノを彼らに与える忌むべき霊装が。
「さぁ…彼らにプレゼントしようじゃないか」
自ら〈サタン〉を名乗る１人の魔術師が呟いた。

「さぁ、楽しい楽しい生き残りゲームの始まりだよ。Ｃｈｏｃｏｌａｔｅ Ｄｒａｇｏｎクン…いや、Ｂｌｏｏｄｙ・ｗｈｉｔｅ様」

間章　―ホムンクルスとサタン―（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしておりますm（＿　＿）m

2　シャイガール　―九条沙也香―（前書き）

メールでの会話は、絵文字を使えないのでかなり簡素になってしまいました（笑）

2　シャイガール　―九条沙也香―

「まだ彼に届かないのかね？」

とある高級ホテルのスウィートルームで、安楽椅子に身を沈めた“サタン”を名乗る男が、不機嫌そうに言った。

「もう届いても良い頃なのですが…」

部下の男が申し訳なさそうに頭を垂れる。

「無くした…などでは困るのだよ。一体何の為にアレを作り上げて今回のゲームを企画したのか…彼にアレが届かない事には何も始まらないじゃないか」

「はい…」

「他の連中には先に始めてもらってもかまわんか…。まぁ、ハンデも良いかもしれんな。彼と同じ条件だと他の連中が可哀相過ぎるか」

そう言って“サタン”はくつくつと笑っていた。

「それにしても、昨日の鬼退治は見事だ。

まるでこの国のＳＡＭＵＲＡＩのようだったじゃないか！！」

◇◇◇◇◇◇◇

７月２３日ＡＭ２３：３０

朝輝は特に何事もなくその日を終え、ベッドに潜り込んでいた。

―　しかし

眠れぬ少女が１人…

『本当に明日朝輝君の家に行ってもいいのかな？』

『大丈夫、大丈夫！！この美香様が保証するよっ！！』

メールの相手は喜屋美香であった。

明日とうとう踏み込むのである、朝輝（思い人）の家に。

『あぁ…どうしよう…何着てこう…』

そして、既にテンパってるのは九条沙也加という少女である。

ベッドの上で白くて細い脚をバタバタさせたり、膝を抱えて丸まったり伸びたりしながら落ち着きなくメールを打っている。

『そんなに緊張する必要ないって～（笑）』

『でも…朝輝君の家だよ！？』

『はいはいわかってるよ（笑）とにかく、明日の１０時頃に迎えに行くから、とりあえず寝な。クマ作ってちゃ魅力半減だぞ☆』

『あぅ…わかったよ…おやすみ（―．―）ｚｚＺ』

緊張と興奮でしばらく眠れなかった沙也加であったが、いつの間にか眠りに落ちていた。

明日から、今までとは１８０度違うセカイに巻き込まれることも知らずに…

2　シャイガール　―九条沙也香―（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしておりますm（＿＿）m

第3節　クールビューティー　―黒江白雪―　&　大福子猫　―結―（前書き）

猫飼いたい…

第3節　クールビューティー　―黒江白雪―　&　大福子猫　―結―

「とうとう来ちゃったよぅ…」

灼熱の太陽の下、夏の日差しに弱そうな白い肌に、背中の中程まである黒髪の少女が、弱々しく呟いた。

そんな、黒髪色白な九条沙也香が立っているのは、高い柵と塀と植物に囲まれたレンガ造りのシックなおウチの柵状の門の前。

ここは都内でもかなりの高級かつ閑静な住宅街である。

「あぅ～…」

ウジウジしている沙也加の肩を美香がポンと叩いた。こちらは沙也香と対極な感じの少女である。染めている訳ではない、自然な茶のショートカットに、部活で日焼けした健康的な肌色。活発で快活な性格のクラスメイト。喜屋美香（よしやみか）である。

「ほれ、熱いからサッサと入るよ」

「あ…待って！！まだ心の準備が―」

ピンポーン、と沙也加の準備が出来る前に美香が門の横にあるインターフォンを押してしまった。

『はい』

「喜屋美香で～す！！」

『どうぞお入り下さいませ』

無駄に涼やかな女性の声の後に、キィっという微かな音を立て、門が内側に開いた。

「ホレホレ！！」

「うっぅ～！！」

沙也加の後ろに回った美香が、彼女の背中をグイグイと押す。

門からドアまでの、ちょっとした石畳を渡り、重厚そうな木のドアの前に立つと、そのドアが内側にすぅっと開いた。

「いらっしゃいませ」

ドアの内側に立っていたのは、沙也加より２０センチくらい背の高い、黒いスーツを着た若い女性であった。なんだか沙也加は彼女の佇まいや、その切れ長の目とスッと通った鼻筋をした彼女の美貌と、なんだか少し冷たい感じに圧倒されていた。

「こんにちは白雪さん」

「こんにちは美香様」

そんな白雪に平然と、しかも親しげに挨拶する美香に少し驚きの目を向け、慌てて自分も挨拶をする。

「こッ…こここんにちは！！」

「こんにちは」

テンパってる沙也加とは対照的に、まるで極まった茶道の達人のように美しい所作で礼をする白雪。

「（かッ…カッコいい！！）」

思わず心の中で叫んでしまった。

「あ、この子が九条沙也加ちゃまね」

「九条沙也加様。宜しくお願い致します」

「は、はいッ！！こちらこそ！！（名前に様付けられちゃった…！！）」

「で、この人は朝輝の…う～ん、メイド？秘書？お目付役…かな…の黒江白雪さん」

「名称はなんでも構いませんよ。さ、こちらへどうぞ」

そう言って無駄に広い玄関から案内されたのはやはり無駄に広い、流石は金持ちと言った感じの応接室であった。

応接室に入ると、臙脂色のふかふかソファーに座っていた朝輝が、立ち上がった。

「いらっしゃい」

「おじゃましますよん」

「ぁ…お、じゃましましッ」

噛んだ…緊張ＭＡＸの沙也加。

「どうぞ」

と言って朝輝が丁寧な所作でソファーをすすめる。

「では、お茶をお持ち致します」

そう言って白雪が応接室から出て行った。

ちょうどいいフカフカ感のソファーに腰掛け、朝輝と美香と沙也加が対面する。

「あ、そうだそうだ」

座って直ぐにそう言って、美香が女の子らしいバックの中からなにやら茶色い封筒を取り出す。

「これ、朝輝への手紙だって」

そう言って美香がテーブル越しに朝輝に封筒を渡す。

「ふぅ～ん」

あまり興味無さそうに朝輝が封筒を眺めた。

「あの受付のお姉さんが渡し忘れたって言ってたから代わりに私が持って着てあげたの」

「まったく…手紙くらい直接家に届いてもいいのに…」

まったく話しに着いていけない沙也加であった。

「そういえば…」

と朝輝が、連盟日本支部経由で送られてきた封筒を、封を切らずにテーブルの端に放置して、思い出したように2人に向き直った。

「なんの用事？」

確かに美香は朝輝の家に行くとは言っていたが、何で行くかは伝えていなかったのであった。

「いやぁ～ねぇ、この沙也加ちゃまが朝輝クンのブルジョワ～な生活っぷりを見たいって言うからさぁ！！」

「……？」

返答に困った朝輝の様子を見て、沙也加がかなり慌てた。

「み、美香ぁ！！」

「ってのは建て前で、単純に暇つぶし」

「…暇つぶしなら良秀とデートでもいいだろ」

いやぁ～デート疲れるし。

とか言ってる内に、ティーセットと美味しそうなバウムクーヘンを乗せた銀のワゴン（個人宅で使われているのを沙也加は始めて見た）を白雪が運んで来て、手際よく紅茶を注ぎ、バウムクーヘンを並べる。

「す、スゴいね…」

今までほぼ空気だった沙也加がなんとか口を開く。

「お手伝いさんがいるお家って、始めてみたよ」

緊張のせいか、話し終えるとこの部屋の冷房が寒く感じられた。

「黒江さんは素晴らしい人だよ、いっつも助けてもらってる」

ワゴンの隣に立っていた白雪が、無言で頭を下げる。

「朝輝は黒江さんがいないと何も出来ないもんね」

「ぐ…返す言葉がない…」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それからしばらく、たわいないおしゃべりと、白雪が淹れる美味しい紅茶としっとりとした柔らかなバウムクーヘンを楽しんだ。

「ちょっと、御手洗いかりてもいい…？」

紅茶＋冷房でトイレに行きたくなってしまった沙也加は、白雪に案内してもらい御手洗いに向かった。

「ふぅぃ〜…」

と沙也加は新築の家みたいにピカピカ清潔なトイレの中にある、洗面台の磨き抜かれた鏡に向かって息を吐いた。

とうとう大好きな朝輝の家に来て、その朝輝と沢山話すことができた。

今夜もコーフンして眠れなそうだ。

髪を整え直し、ハーブの香りのするレストルームから、微かに木の香りのする廊下に出る。

ここは応接室の直ぐ隣であった。朝輝の家の真ん中には小ぶりな木の植わっている中庭があり、そこから夏の陽射しが程よく廊下を照らしていた。

「みぃ〜」

すると、突然沙也加の足元から猫の鳴き声が聞こえた。

沙也加の足元にいたのは真っ白い小さな子猫であった。

「あ…カぁワイイ！！」

思わずしゃがみこんで、子猫に手を伸ばす。

もちろん怖がらせないように、ゆっくり下からである。

「みゃう！！」

「きゃっ！！」

下から近づけていた沙也加の白い指に、おとなしかった子猫が突然爪を出して猫パンチを繰り出してきた。

「痛い…」

血は出ていないが、かなり痛かった。

「みぃ～う」

既に子猫は沙也加から少し離れた日陰にいた。

「痛いよ子猫ちゃん…」

子猫はぷいっと向こうを向いてしまったたが、まだそこにいた。

「ふん、良い気味じゃ、もしお前が朝輝に何かしたらこんなものでは済まさぬからの」

「…え？」

猫がしゃべった？

「こ、子猫ちゃん？」

「みぃ～」

そう猫らしく普通に鳴いて、子猫はどこかへ行ってしまった。

首を傾げながら応接室に戻ろうとしたところ、

「どうしたの！？」

少し慌てた様子の３人が、応接室から出てきた。

「九条さんの悲鳴が聞こえたから」

沙也加の顔がかぁっと熱くなる。

みんなに悲鳴を聞かれたとは恥ずかしい。

「白い子猫ちゃんがいて…撫でようとしたら右手を引っ掻かれてビックリしただけだから大丈夫…」

「結（むすび）に引っ掻かれた…大丈夫？」

「あうぅ…！！」

見せて、と言って朝輝が唐突に沙也加の右手を軽く握ったため沙也加が思わず声を出してしまった。

沙也加の右手を調べている朝輝の後ろで、沙也加と目が合った美香がニヤニヤしてウィンクをよこした。

それにしても、朝輝の手は大きくて、暖かいと言うよりも熱かった。

鼓動が激しくなり、呼吸も少し荒くなってきた。

「ん、傷は大したことないけど、一応消毒しておこう」
その言葉を聞いた白雪が、救急箱を取りに行った。
手を握られて少しポーっとしていた沙也加だったが、朝輝が手を離したのでやっと正気に戻る。
「あ…そう言えば…」
と、正気に戻った沙也加がさっきあった事を口にした。
「朝輝くんちの猫…結ちゃんはしゃべるの…？」
一瞬、朝輝が固まったのがわかった。
あぁ…なんて変なことを言ってしまったのだろうか。
頭おかしいと思われたらどうしょうと沙也加は後悔した。
朝輝は朝輝で、
「（結のやつ…なんてことを…あんなに一般人の前では猫のまましゃべっちゃダメって言ったのに）」
と、心のなかで結を叱った。
「（まったく！！朝輝め、妄（わらわ）というモノがありながらあんな娘の手など握りおってッ！！）」
物陰に隠れていた結が、そんな2人の光景をみてヤキモチを妬いていたのであった。

第3節　クールビューティー　―黒江白雪―　&　大福子猫　―結―（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしておりますm（＿　＿）m

第2章第1節　サタンのゲーム（前書き）

このお話しはここから始まりみたいなもんです。

第2章第1節　サタンのゲーム

世間話の続きを楽しんでいる時であった。

「あっ」

沙也加が誤ってティーカップを倒してしまったのだ。

まだたっぷり有った中身が、深い飴色の流れとなって先ほど朝輝が放置した封筒の方へと流れる。

「…！？」

汚しては大変と、沙也加がとっさにテーブルから封筒を持ち上げる。

―　その時

ギュバッ！！

という怪音と共に、茶封筒が炸裂し、煌めく何かが沙也加の方に飛んだ。

「美香！！黒江さん！！」

朝輝はとっさに魔術師2人に号令をかけ、自身も臨戦態勢に入る。

その対応の早さは流石と言えよう。

しかし、魔術的にかなり安全なはずのこの家の中で一体なにが有っ

たと言うのか？

「え…な、何…？」

首元に何かひんやりした感触がある。

沙也加は訳が解らずその場に立ち尽くしていた。

「九条さん、そこを動かないで！！」

「え…？」

「黒江さんは結を〈神聖結界〉の中に閉じ込め下さい！！」

「かしこまりました」

そう言って白雪が部屋から出て行った。

沙也加はまったくもって何が起きているのか解らなかった。

「美香、君は九条さんをお願い」

「わかった」

何時になく真剣な顔で美香が沙也加の前に立った。

「美香…なにが起きたの？」

「説明は後でいくらでも聞いてあげるから今は目を閉じて！！」

「え…でも」

「いいから！！」

沙也加は目を閉じた。

閉じてみると、首元のひんやり感をより一層強く感じた。

目を閉じた沙也加の首には、美しいアクセサリーが付けられていた。

勿論、さっきまでそんなモノはなかった。

それはペンダントであった。

美しいダイヤモンドが沙也加の首と胸の中間辺りで輝いていたが、そのダイヤの中心はまるで病魔に犯された様に黒くなっている。

「（これは…）」

美香は思わず素手で触りかけたが、途中で手を止める。

何かはわからない。

しかし、1つだけわかることがあった。

「（危険だ…私の手に終えるような代物じゃない…）」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

朝輝は封筒が炸裂した時に、ヒラヒラと舞い落ちて来た手紙を読んでいた。

「（…！！またか、またなのか！？…また僕のせいで魔術と関わり

のない人をッ）」

手紙にはこうあった。

『やぁ、元気かね？

コレが届いたってことはやっとゲームに君が参加してくれたってことだね。

嬉しいねぇ！！非常に嬉しい！！

さてさて、本題だ。　君はたった今、このゲームのプレイヤーになった。

プレゼントはちゃんと届いただろうね？

ダイヤのペンダントだよ。

強烈で強力な悪魔の〈カケラ〉入りのね。

それを受け取った人間が君とともにゲームに参加する相棒だ。

そして君の主人でもある。

プレゼントを受け取ったのは一般人の女の子だろう？

何せ、そういう風に仕組んだのだからね。

発動条件は、“真堂朝輝”の家の中で、“年の近い一般人の女の子”があの封筒に触れることだよ。

何せ、魔術師でもない女の子が君の家にいると言うことは…そういうことだろう？

君が青春を楽しんでいるようで何より。

もとより、そうでもなければもっと別の方法を採ったがね。

ではゲームの説明といこうか。

まぁ、簡単だよ。

まずはその娘と“契約”だ。

君の血をそのダイヤに吸わせ、僕（しもべ）になると誓うんだ。
３０分以内にしないと、その娘は死ぬ。
ダイヤに命を吸い取られてね。

次からはもっと簡単さ。
戦って戦って戦って生き残る。
それだけさ。

このゲームの参加者は君たちをあわせて４ペア。
それぞれが皆“カケラ”を持っている。
他のペアを倒してその“カケラ”を集めるんだ。
そうすればどんどん強くなって行くからね。

重要なのは最初は君は魔術が使えなくなるということだ。

これは皆同じ条件。
最初の戦いは皆、魔術素人である主人しか戦えない。
あぁ、言い忘れたがどのペアも主人は一般人だ。
　従者達はカケラを集めるにつれて力が戻る。ただし、主人が死ぬと従者も死ぬから気を付けたまえ。
後、ミニゲームも用意してあるよ。
まぁ、内容はこちらで適当に決めていくから、楽しみにしていてくれたまえよ。
ミニゲームをこなすことでも君たち従者にも徐々に力が戻る仕組みさ。

ＰＳ　勝手ながら君の使える術式は“竜の力”に限らせてもらうよ。

サタンより、崇拝する白き竜へ　『

ギリギリと、朝輝が歯をを噛み締める音がした。

「（ふざけるなッ！！）」

グシャグシャっと手紙を丸めて荒っぽく放り投げた。

「（サタン…か、どんなヤツかしらんが誰にケンカ売った教えてやるよ）」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「九条さん。君はこれから今までのような日常はおくれなくなる」

「美香から…す、少しだけ聞いた…、朝輝君と美香が魔法使いだって…でも…」

朝輝と対面した沙也加の首元には、ダイヤが輝いている。

朝輝はわずかに唇をかんだ。

握った拳も震えている。

「そう簡単に信じるとは思ってないよ…だから」

そう言って朝輝は、握った拳を体の前に持ち上げた。

ほう　っと朝輝が少し広げた手のひらの中で、白い炎が穏やかに燃えていた。

思わず息を飲んだ沙也加に、

「口頭での説明には時間がかかるから、九条さんには直接理解してもらうしかない」

と言って、白い炎を握り潰した。

「美香、サポートを。これから九条さんに理解してもらう。九条さんの尊厳を守るために、記憶の逆流を防いで欲しい」

「わかった」

美香はそう言って朝輝の後ろに立った。

「九条さん、目を閉じて」

言われた通りにする。

もう訳がわからない…

沙也加は自分がおかしくなってしまったのかと思い始めてた。

「ごめんね…九条さん…僕のせいで」

朝輝の暖かな指先が、沙也加の白い額にそっと触れる。

―　次の瞬間

暖かかな指先が急に熱くなり、そこからスゴい勢いで朝輝から“情報”が流れ込み、沙也加は全てを知った。

朝輝や美香が本当に魔術師であること、連盟について、魔術について、自分がこれからなにをしなければいけないのか。

強制的に理解させられた。

そっと額から朝輝の指先が離れ、沙也加は目を開けて朝輝の顔を見た。

何時もの、沙也加の大好きな朝輝だが、なんだか今までと違って見えた。

「事情は理解したね」

朝輝が優しい口調で沙也加に尋ねる。

朝輝の中では後悔と罪悪感と怒りとが渦巻いていたが、沙也加は悪くないのだ。

悪いのはサタンと……

「う…うん」

目を伏せて答える。

理解はしたが、まだ気持ちの整理が出来ていなかった。

「これから儀式を行う」

そう言って朝輝が、バームクーヘンを切り分けたナイフを手に取った。

冷えた光を放つ刃を、朝輝は左手の指先に押し当てる。
あまりに痛々しい光景に沙也加が目を閉じていた。
見ていられなかったのだ、朝輝が自分のために体を傷つけるところなど。
自身にナイフを突き立てられるよりもずっと痛かった。
「…ッ」
指先から溢れ出した真っ赤な液体を、沙也加のペンダントに近づける。
「九条さん…ごめんね…」
そして傷口をダイヤの滑らかで硬い表面に押し付けた。

第2章第1節　サタンのゲーム（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしておりますm（＿＿）m

間章２　熾天使（前書き）

間章ではちょっとずつ過去に触れて行きます。

間章2　熾天使

イギリス、ロンドン　国際魔術連盟本部〈四天使の間〉

その部屋は、四角い黒御影石のテーブルと、４つの椅子しかない部屋であった。

そのうち3つは使用されているが、１つだけは座る者がない。

「あらあら、そういえばもうすぐに〈ウリエル〉ちゃんが帰ってくるんじゃなかったかしら？」

その椅子の1つに座っている、３０歳前後くらいの穏やかそうな女性がおっとりと言った。

彼女は青いゆったりとしたドレス風の服を着て、長い豊かな栗色の髪に白い百合の花を挿していた。

彼女が動くたびに、青い生地がまるで美しい水面のように波立つ。

「うむ…この1年で〈ウリエル〉も大きく成長したじゃろう」

青い服の女性〈ガブリエル〉の言葉に、白いローブを纏い、それに不釣り合いな赤いワニ皮の靴を履いた老人が言った。

「はッ！！案外変わってねぇかもな。俺は昔のままのアイツが好きだぜ。そう思わねえか？」

白い老人〈ミカエル〉の言葉に、緑色のシャツとジーンズ。そしてベルトにジャラジャラとチェーンを付けた金髪の若者が椅子の背も

たれに寄りかかって言う。

「〈ラファエル〉、彼には成長してもらわねばならんのじゃ」

「わぁかってるって、だからアイツを死刑にすんのを3人して必死で止めたんだろう？やつはまだまだ成長するからな。なぁ〈ガブリエル〉、あんたもそう思わねえか？」

「そうねぇ、彼はまだまだ成長真っ盛りだものねぇ。ちゃんと食べてちゃんと運動してるかしらねぇ〈ウリエル〉ちゃん」

母のような気持ちで彼を見守っている〈ガブリエル〉であった。

「あやつのことは、儂とて心配じゃ」

「なぁ、ちょっくらアイツんち行っちゃダメか？すぐ帰って来るからよ。誰か1回くらいは見に行ってやったほうがいいよなぁ。そう思わねえか？」

椅子から立ち上がりかけた〈ラファエル〉を〈ミカエル〉が制止する。

「それはだめじゃ。我々四天使が同時に2人も連盟本部を離れてはならぬ」

トスンと椅子に座り直した〈ラファエル〉が、

「わぁかってるって。言ってみただけだ」

と〈ミカエル〉に向かって手をヒラヒラさせた。

「どうせ来月中にもここに顔を出しにくるじゃろうしのう」

今日もこの3人の天使たちはここに座してもう1人の復帰を待っていた。

間章２　熾天使（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしておりますm（＿＿）m

2節　Ｂｌｏｏｄｙ・Ｗｈｉｔｅの過ち（前書き）

つくづく自分はダメ人間だなぁ…と、思いました。

2節　Ｂｌｏｏｄｙ・Ｗｈｉｔｅの過ち

血にまみれた真っ赤な世界で、黒い髪の少女がこちらに向かって両腕を広げ、必死に何かを叫んでいた。

『…！？―ッ！！―ぁ―！！』

しかし、彼には聞こえない…届かない。

徐(おもむろ)に彼の右腕が振り上げられる。

彼の視界の隅に、恐ろしい大鎌のような鉤爪が生え、白く煌めく鱗に覆われた手が見えた。

その鉤爪も鱗も、たった今引き裂き、握りつぶし、引きちぎったモノの体液で赤く染まっている。

少女は相変わらずこちらに何か叫び、まるで何かを抱き留めようとしているように、両腕を広げている。

―そして

彼の右腕が、付着物を撒き散らしつつ彼女に向かって振り下ろされた。

最後の一瞬、腕を振り下ろした彼の目にキラリと光るモノが映った。

それは彼女の右腕にはめられた銀の腕輪。
その凛とした輝きを目にした彼は正気を取り戻したが　―
―　既に遅かった
グシャリ　と、右手の鉤爪と、怪力が人体を破壊した感触と音が、右手と耳朶に伝わってくる。
『グッ…ゴオオォォォォォオ』
◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇
「―ォォォォォぉぉおッ！！……がっ…ハァハァ…ッ！？」
真堂朝輝は自らの声で目が覚めた。
「朝輝さま」
いつの間にか白雪が朝輝の大きなベッドの上に乗り出し、朝輝の手をその白くて細い手指で包み込むように握っていた。
ひんやりとした白雪の手が心地いい。
「黒江さん…びっくりしたでしょ？」
「……」
「なにせそっくりだからね…」

朝輝があれから2年間、強力な精神安定用の魔術薬を飲んでいるにも関わらず、特に今年4月からほぼ毎夜のようにうなされている理由が、今日白雪にもわかった。

「だから…ですか。あんなに必死に彼女を助けようとしたのは」

白雪は気付いていた。

彼女と対面する朝輝が怯えていることに。
朝輝が戸惑っていることに。
朝輝の中で激しいものが渦巻いていることに。

ティーカップを持つ手も震えていた。

彼女に何度も謝っていた。

「4月に同じクラスになって初めて彼女と会った時…僕は夢を見てるのかと思った」

額にじっとりと汗をかき、白雪に手を握られたまま朝輝は呟くように続ける。

「でも現実だった…彼女が生き返ったのかとも思った…でも…彼女は…彼女は……！！」

ベッドに横たわったまま、朝輝は涙を流していた。

「朝輝さま」

制止するように、白雪が朝輝の手を更に強く握りしめる。

「あれからまだ2年です。心の傷を癒やすには短すぎる」

ベッドに身を乗り出し、朝輝の手を握っていた白雪が、片方の手を離して、その手を朝輝の頬に優しく当てた。

あれだけのことがあったのだ。

気が狂っていないだけいい。

「いや…」

頬に当てられた白雪の手に朝輝が片手を重ねた。

朝輝の手はいつも熱い。

「もう2年…だよ」

真夏の昼下がりの太陽光が、白いレースのカーテンを通して程よく室内を照らしていた。

時刻は午後3時30分過ぎ。

あの儀式の直後に朝輝は気絶したらしい。

今もどうしようもない倦怠感に体が支配されていた。

何せ根こそぎ魔力を持って行かれたのだから仕方がないか。

ふぅ、と息を吐いて、朝輝がベッドから上体を起こした。

「もう、平気ですか？」

白雪が無表情だが心配そうな様子で聞いてくる。

「あぁ、大丈夫」

それより、と朝輝はまだ涙の名残がある顔で、白雪に少し笑って見せた。

「今日から忙しくなるよ」

「承知」

これより、力を失った少年と、力を手に入れた少女の闘いが始まる。

2節　Ｂｌｏｏｄｙ・Ｗｈｉｔｅの過ち（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしておりますｍ（＿　＿）ｍ

第3節　新居と始まりと決意（前書き）

この節は、主に沙也香視点です。

第3節　新居と始まりと決意

「えっとね…この黒い人が黒江白雪さん」

宜しくお願い致します。

と、黒い人呼ばわりされても動じない白雪が頭を下げた。

「で、この白くてちっこいのが結（むすび）」

朝輝に抱っこされている、小さな白い子猫が、気に食わないという感じで鳴いた。

「んで、これがカグー」

朝輝の足元に行儀良くお座りしているのは毛並みの良い黒いラブラドール犬である。

「宜しくお願い致す」

黒ラブのカグーが平然と古風な人語を喋り、会釈なんかしていた。

「お…お願いします」

と沙也香は全員に頭を下げた。

これから一緒に生活して行くメンバーはなんかスゴいな…

朝輝が目覚めてから、２時間程経った。
その２時間はすごく忙しかったたし、大変だったのだ。
まず、朝輝は沙也香の家に行くと言い、白雪と沙也香と３人で沙也香の家に向かった。
◇◇◇◇◇◇◇◇◇
たまたま休みだった銀行員の父と、専業主婦の母。中学生の妹に挨拶を済ませた朝輝。
物腰が柔らかで、礼儀正しい朝輝は沙也香の家族に直ぐに気に入られた。
和やかに会話する父と母と朝輝と、お姉ちゃんの彼氏！？彼氏！？玉の輿！？と騒いでいる妹をドキドキしながら見ていた沙也香であったが…
「それでですね」
朝輝の一言で妹と、元々微動だにしなかった白雪以外全員が凍り付いた。
「娘さん…沙也香さんを僕に下さい」
「「「え…？」」」
理解が追いつかない。
今日までたいして話もしたことなかったのに…
嬉しいとか、恥ずかしいとか、まったく分からない。

朝輝君なりの冗談…なのかな？

妹の騒ぎ声が、何故か遠く感じた。

真面目な父も、優しい母も、固まっていた。

「ちょっと失礼します」

黒江さん。

と朝輝は白雪を呼び寄せ、

「これから“理解して頂きます”。黒江さん、サポートよろしく」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

沙也香に施した時程の情報量ではなかったが、ある程度自分たちの娘の状況を“理解”した沙也香の家族。

沙也香の父は少しの時間、俯いて思案していたが、

「至らぬ娘ですが、宜しくお願い致します」

マジですかお父さん…

お母さんはハンカチで目元を抑えているし、うるさかった妹もかしこまって思案顔。

ホントに結婚するみたいになってる…

あぁ…私、出来るなら本当に朝輝君と…

「それじゃあ九条沙也香さん、君の荷物を運ぼうか」

立ち上がった朝輝がにっこりして言った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「今日からここが九条さんの部屋だよ」

そう言って朝輝が、磨かれた飴色のドアを開けた。

「うわぁ〜！！」

思わず声をあげてしまった沙也香。

沙也香に与えられた部屋は朝輝邸の3階、朝輝の部屋の隣にある部屋であった。

しかし、“部屋”と言っても、普通の家にある一部屋ではなく、いわゆる高級マンションや高級ホテルの“一室”のようなものであった。

広〜いリビングにシステムキッチン、キングサイズよりでっかいベッドのある寝室、ジェットバス機能のついた丸いプールみたいなお風呂、寝室の隣にはウォークインクローゼットまである。

置いてある家具の1つまで高そうだ。

「じゃあ、詳しいことは黒江さんに聞いてね」

そう言って朝輝は部屋から出ようとしたが、

「あっ…と、朝輝君！」

ん？

と沙也香に呼び止められた朝輝が振り返る。

「ほ、本当にいいの？」

どうして朝輝がここまで良くしてくれるのかわからない。

たくさん話したのだって、今日が初めてだ。

自分のせいで朝輝に迷惑をかけたのに、こんなに良い部屋をあてがってくれて…こんなに良くしてくれて…

「いいって、なにが？」

「こんなに良いお部屋…私にはもったいないよ…それに、私は…」

部屋から出ようとしていた朝輝が、少し俯いている沙也香のもとに歩み寄った。

「九条さん。なんにも気にすることないんだよ？」

優しい優しい朝輝の声と言葉。

優し過ぎて逆に辛い。

「でも…」

「九条さん」

「ひゃッ！？」

唐突に朝輝に手を握られて、思わずビックゥとしてしまった。

朝輝君の手…暖かくて優しい大きな手。

「九条さんは今日から家族だから」

「えっ…？」

「僕達はもう家族だよ」

「朝輝君…」

「さぁ、今日はもう何も心配せずにゆっくり休んだ方がいい」

そう言って朝輝はそっと手を離した。

本音を言えば、もっと朝輝と手を繋いでいたかった沙也香であった。

沙也香の手には、まだ朝輝の手の暖かい感触が残っている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

部屋から出、ドアをそっと閉めた朝輝はその場でしばし立ち止まっていた。

見なくとも、自分の手が震えているのがわかる。

触れるべきじゃなかった、自分は九条沙也香に触れてはいけなかっ

た。

自分が触れたら…壊してしまうかもしれないから。

「そう…九条さんは何も心配しなくていいんだよ…何も」

今度こそ絶対に守り抜く。

今度こそ絶対に過ちを起こさない。

絶対に傷つけない。　絶対に誰にも傷つけさせない。

真堂朝輝は固く誓う。

彼女との出会いは神の与えた罰。

そして贖罪のチャンス。

第3節　新居と始まりと決意（後書き）

執筆が遅くて申し訳ありませんm（＿＿）m

間章　完璧嫌いな錬金術師

「彼には欠点、もとい弱点があるのよ」

白衣を着た女錬金術師が長い脚を組んで椅子に座り、助手である錬金術師の卵に向かって青白くて細い指を立てた。

「は、はぁ」

錬金術師の卵は、良く理解出来ない風にちょっと首を左に傾げた。彼女の癖である。

「さて、彼の弱点とはいったい何でしょうか？」

「え…問題ですか？」

ちょっと慌てた卵に女錬金術師は、そうよと言ってコーヒーに口をつける。

むむむ…

と考える卵を女錬金術師は楽しげに観察していた。

「わからなかったら深呼吸しなさい」

言われた通りに深呼吸をし、息を吐いて一言、

「…わかりません」

丸いレンズの眼鏡越しにちょっとだけ上目使いで申し訳なさそうにしている弟子に、女錬金術師は優しく微笑む。

「そうね、じゃあ特別に教えてあげましょう」

そして女錬金術師は深く椅子に座り直して続ける。

「彼は上手く栄養を吸収する事が出来ないの。それは何を意味しているかはわかるわね？」

「は、はい。彼は通常の魔術師よりも強大な魔力を作りだし、保有し、行使します。つまり普通の魔術師よりも大量のエネルギーが必要となり、それを作り出すための栄養が摂取出来なければ彼は直ぐに行動不可能となる。魔術を使わなくとも、常に大量の魔力を作り出し、体に保持するのにはかなりの消耗があるからこそ致命的、と言うことですよね？」

目を閉じて弟子の解答を聞いていた女錬金術師は、目を開けて微笑んだ。

「その通りよ」

じゃあ、と女錬金術師は続ける。

「彼の左膝。そこは直ぐに壊れる…まぁ、関節が外れたり折れたりし易いってことね。のは何故だか分かるかしら？」

今度の質問に対し、弟子は考える間もなく答える。

「わかりません」

「まぁ、そうでしょうね」

「何故ですか？」

その問いに、女錬金術師はふふっと笑った。

「彼は魔術師としてほぼ完璧。最強と言ってもいいわ。なにせ“ストック”のお陰で死なない訳だし…こうなったら生物的にも完璧だわ」

でもね、と彼女はいかにも楽しげに続ける。

「完璧ほどつまらないものはないわ。だって、勝ち負けのわかっている試合なんて見ても面白くもなんともないじゃない。暇つぶしにもならないわ…。さっきの栄養の吸収の話しもそうだけど、なにか弱点があるからこそ見ていて面白いのよ？」

「…は、はぁ。では、彼はその障害については知っているのですか？」

「いいえ。本人も周りの人間も、ただの食いしん坊だと思っているわ。左膝はまだ気付いてないみたいだし」

そう言って彼女はまたコーヒーに口をつけた。

「作るのに苦労した分、じっくりと実験に付き合って良い結果を出してくれなきゃ話しにならないわ。まぁ、今のところは楽しくてしょうがないけれどね」

そう言って“彼”の創造主は笑っていた。

第４節　居候の神様（前書き）

久々の更新…な気がしますね…

第４節　居候の神様

「はぁ～…」

白雪に間取りなどの一通りの説明を受け、広い部屋に１人取り残された沙也香が溜め息を吐いた。

今日からここで暮らす…

なんだか現実味がない。

リビングにある、フカフカな黒いソファーにボスッと身を沈め、ぼんやり。

美香も用事があると、とっくに帰ってしまい、暫くは家族にすら会えそうにない。

でも…

朝輝君は私を家族だって言ってくれた。

あの言葉は効いた。

あの時に不安で不安で仕方なかった沙也香の心に、微かだが暖かな明かりが灯ったのだから。

「頑張らなくちゃ」

明日から魔法のお勉強らしい。

魔法のお勉強って何するんだろ…

それを考え、あれこれ妄想していると何だか楽しくなって来てしまった。

恋には奥手だが、基本的にはポジティブ思考な沙也香である。

「そ・れ・にぃ〜！！」

朝輝君の家だよ！！

これってドーセー！？

朝輝君と1つ屋根の下！！

それにこの部屋の隣が朝輝の部屋である。

「朝輝君に“まほー”のお勉強を教えて貰うなんて…」

思わずソファーに付属のクッションを抱きしめてジタバタする。

「…そういえば夕ご飯になったら呼ぶって白雪さんが言ってた」

ジタバタし終わって不意に冷静になったらお腹空いていることに気が付いた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ〜…」

自室の白いソファーにドサッと倒れた朝輝が深々と溜め息を吐いた。

「みぃ～」

うつ伏せに倒れた朝輝の背中に、ちっこい白い子猫がひょいっと乗って来た。

結(むすび)がそのまま朝輝の背中でゴロゴロし始める。

「結～、夕飯何だろうね。今日はリクエストし忘れたけど黒江さんなら九条さんの歓迎会の準備は抜かりないだろね～」

朝輝が伸びたまま結に言う。

すると　―

「うっぐ！？…僕の上でいきなり姿変えるのやめてって言ったでしょ…」

ふやけている時に、背中に乗っているモノの重量がいきなり増大したらそりゃあ苦しい。

「妾は認めぬ」

声と共にふぁさり、と緩く波打つ漆黒の長髪が一房、朝輝の横顔にかかる。

「九条さんに意地悪しちゃだめだよ？」

朝輝が少し顔を上げて言う。

顔を上げると、美しい長髪から花の蜜のような甘くていい香りがし

た。

「認めぬったら認めぬ！！あやつが朝輝の主人だと？ぬかせ！！」

朝輝の背中で駄々をこねているのは、膝辺りまである、緩く波打つ漆黒のおかっぱ長髪に、今からお祭りでも行くのかというような、水色の生地に金魚柄の可愛らしい浴衣を着た、朝輝や沙也香と同い年くらいの少女であった。

「朝輝は妾だけの所有物（モノ）じゃ…」

そう言って結が背中からギュッと抱きついてくる。

「あの…そろそろ降りてくれない？」

「嫌じゃ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

リンリン　と沙也香の部屋にあるインターフォンが、控え目な音をたてた。

そう。朝輝の家の各部屋にはインターフォンが着いている。

寝室にいる場合などに、廊下からのノックに気づかないからだ。

「はい」

する事も思い浮かばず、ソファーに座ってデッカい液晶テレビで旅番組を見ていた沙也香が、立ち上がってドアを開けた。

「沙也香様、ディナーの用意が整いました」

相変わらず無表情な白雪が静かに告げる。

「あっ、すいませんわざわざ」

いいえ、と答える白雪。

やっぱり白雪さんは背が高いな〜。

それにしても…ディ、ディナーですか…

少なくとも沙也香の家では外食する以外で使うことなんか無い単語だった。

「それでは此方へ」

白雪が案内するのは朝輝の部屋…

ドキドキしてきた沙也香。

白雪が、沙也香の部屋と同じ作りのドアの横にあるインターフォンを押した。

どうぞ〜、と朝輝の声。

沙也香はその声で一瞬だけ心臓が痛くなった。

白雪が静かにドアを開け、どうぞと沙也香を促す。

「あ、はい。ありがとうございます」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

入ってみると、そこは沙也香の部屋と全く同じ作りの部屋であった。

細かい所は違うが、大差ない。

朝輝はリビングにある、６人掛けのテーブルに着いていた。

しかし　―

「あっ、は…初めまして！！」

知らない女の子が朝輝の隣に座っていた。

金魚がらの浴衣を着た髪の長い可愛らしい女の子。

沙也香はかなり動揺した。

だ…誰！？

まさか朝輝君の彼女とか…？

さっきまでいなかったのに…

しかも、その女の子は、スゴく嫌そうな目で沙也香を見ていた。

「九条さん、初めましてじゃないよ」

朝輝がふふっと笑った。

「えっ？」

こんな娘知らないよ？

「結だよ」

えっ？　どゆこと？

「結ちゃんて…子猫ちゃんじゃないの？」

思わず震える声で聞き返す。

「ふん、物わかりの悪いヤツじゃ」

相変わらず嫌そうな目で此方を見ていた少女が口を開いた。

その声は…

「あ…」

今日の昼間、結に引っかかれた時に聞いた声であった。

「言っておくが、」

と結が沙也香に更に厳しい表情を向ける。

「妾はお主を認めてはおらぬ」

まさか私嫌われてる？

「それに、これがイチバン大事じゃが」

こら、結！

という朝輝の注意を聞かず、

「朝輝は妾のモノ…お主などには渡さぬ」

えぇ～！？

まさか…朝輝君のこ、ここ恋人ぉ～！？

ショックで固まってしまった沙也香に、疲れた表情の朝輝が溜め息混じりに言う。

「九条さん。化け猫の戯れ言なんか無視していいよ」

にゃ、にゃんだと！！

と朝輝に向き直った結が喚く。

あ～、はいはい。

と結を適当にあしらう朝輝。

「九条さん。こちらへどうぞ」

と立ち上がった朝輝が、正面の席の椅子を引いてくれた。

「あ、ありがとう」

むぅ！！そんな女に構うな朝輝！！

部屋中に結の声が響いていた。

「誤解しないでね九条さん」

正面に座った朝輝が、疲れたような苦笑いを浮かべていた。

「この結は恋人でも何でもなくて、」

あぁ…良かった。

少し安心して、体が軽くなった気がした。

「ただの居候の神様だから」

「え？…えぇ～！？」

今度は思わず叫んでしまった沙也香であった。

「そうじゃ！！妾は神ぞ。この家に居たくば、畏れ敬え奉れ！！」

平伏せ～！！

と立ち上がり、胸を張って声高に叫ぶ結。

「…居候のクセに」

隣で朝輝がボソッと呟いた。

「ごめんね九条さん」

「う、うぅん…」

か、神様…

神様と一緒に住むのか…

早くも（魔術の話し抜きで）波乱の予感のする沙也香であった。

第5節　Ｂｌｏｏｄｙ・Ｗｈｉｔｅの約束（前書き）

やっとこさ更新…

第5節　Ｂｌｏｏｄｙ・Ｗｈｉｔｅの約束

食事の後、沙也香が退室し、朝輝はソファーに身を沈めて適当に付けたテレビ番組を見ていた。

「み～ぃ」

そんな朝輝の膝の上で真っ白い子猫が、まだ歯のない口で朝輝の指をもぐもぐしたりしてじゃれている。

いつもの、とても穏やかな時間であった。

「くすぐったいよ。結～」

無邪気にじゃれている子猫を持て余し気味の朝輝。

…しかし、なんの前触れもなく唐突に朝輝の表情が変わる。

「くっふふっ…」

別にテレビ番組が面白かった訳ではなかった。　その証拠に…

「あぁ…どんなゲームになるんだろうなァ」

朝輝の表情が引き裂いていた。

鬼を滅殺した時に浮かべていたそれと同じ表情。

愉しくて愉しくて堪らないといった、狂喜の笑み。

「もうすぐ“謹慎”も解ける」

背中に刻まれた7つの呪縛のうち6つ消え、残り1つも後ちょっとで消える。

「サタンと他の“参加者”…殺し応えがあるやつならいいねぇ」

「朝輝、朝輝」

そんな狂気に捕らわれていた魔術師の名を、いつの間にか少女へと変化した結が、優しく呼ぶ。

「だめじゃ、朝輝。狂気に捕らわれるな」

愛らしい姿の少女が、朝輝の前にちょこんと座り、朝輝を諭すようにじっと目を見つめていた。

「ん、ああ。ごめん結…」

正気に戻り、そういって結の頭をなでなでしてやる。

「朝輝…ッ」

突然に結が前にのめって、真っ正面からぎゅっとしてきた。

「ど、どうしたの？」

少女の姿の時はいつもは後ろからしかくっ付いて来ないのに。

故に朝輝はちょっと驚いていた。

結の黒曜石のような美しい黒髪から、花の蜜のような甘やかな香りが鼻孔をくすぐる。

「妾は怖い…」

「な…なにが？」

久しぶりだった。

結が怯えているなんて、初めて出会い、朝輝が結を助けたあの時以来である。

「朝輝が…朝輝がいなくなってしまいそうで怖い…」

朝輝の体を締め付けるか細い腕だけでなく、結の全身から震えが伝わってきた。

「大丈夫だよ、結。僕はドコにも行かないよ？」

「あの女のせいじゃ…」

「あの女って…九条さん？」

「それ以外に誰がいる！！」

朝輝の肩の辺りに顔を埋めていた結が不意に顔をあげた。

「結…」

結は泣いていた。

麗しい瞳から透明の雫がはらはらと零れている。

「妾は朝輝と一緒にいたい！！これからもいつまでもッ」

「…大丈夫だってば。僕はどこにも行かないって言ったでしょう？」

「約束できるか…？」

「もちろん」

そう言って朝輝は何時ものように微笑んだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

場面は移り、中国の上海

夜の帳が降りてはいるが、ここ上海の街中は煌々とした雑多な光に包まれていた。

と言っても、光が届かない所は世界中の何処にでもあるわけで、東京だろうが、ニューヨークだろうが、道を1本外れるだけで雰囲気は驚くほど変わる。

そんなほの暗く、薄汚れた細い裏道を、1ペアの若い男女が人目を忍ぶように進んでいた。

見る人よっては、駆け落ち中のようにも、ただの逃亡者のようにも見える光景。

確かに2人には明確な目的があった。

ただしそれは駆け落ちでも、逃亡でもない。

「竜が力を取り戻す前にまず竜を狩る」

「その“竜”が日本にいるのは確かなの？」

「お前はまだ“こっち”の世界に来たばかりだから知らないのはしょうがないが、ヤツは日本にいる」

「竜になんて…勝てるの？」

「勝つさ。勝ってお前を解放し、俺は俺をバカにした奴らを見返してやる」

「…あんたのそーゆーとこ嫌い」

右手で自分の手を引き、左肩に荷物を引き下げて裏道を急ぐ少年の後頭部に向けて少女が言う。

「あたしだって戦うからねッ」

コイツに任せるのがイヤなのは、コイツが幼なじみだからだけではない。

確かに幼なじみのコイツに守られると言うのは、プライドが許さないが、それ以上に…

「…あたしの為に戦って死んだりしないでよね、後味悪いから」

きっとコイツはあたしを守る為に無茶をするから。

「俺は俺のやりたいようにやるだけだ」
こちらを振り向きもせずに、ずんずん進んで行く少年。
「そ、それに！！あたしはまだ許してないんだからね！！」
「俺がなんかしたかよ？」
「あんたが手品師だか魔術師だったってのをあたしに隠してたこと…許してないんだからね」
あーわかったわかった。
と適当に答える少年と、少年に手を引かれ、ちょっとふくれっ面の少女が、自分たちの運命を賭けた戦いに身を投じようとしていた。
そして薄暗闇の中、ダイヤの欠片が少女の首元で揺れている。

第6節　勉強開始（前書き）

朝輝が主人公だったはずが、いつの間にか沙也香視点の話に…（笑）

第6節　勉強開始

「さて、九条さん」

これまた沙也香の家では考えつかなかいような豪華な朝食を（夕飯はなんかご馳走になるのが申し訳なくなくなるほど豪華だった）食べ終わり、朝輝がイスにもたれかかって言った。

時刻は午前9時ちょっと。

色々とドキドキしていた沙也香としては、朝輝が起きるまで部屋で1人でいて、不安で不安で仕方がなかった。更に言うと朝ご飯も美味し過ぎて、食べ過ぎた上に、現在9時過ぎと言うことは3時間後にはお昼という、かなり胃袋的にハードな感じである。

「魔術のお勉強を始めようか？」

今日からやることは知っていたが、まさか今言われるとは思っておらず、ちょっと焦った沙也香。

朝輝に無害な笑顔を向けられて、顔が熱くなっている。

「う、うん。お願いします」

「じゃあまず、魔術って何だと思う？」

「えっと…」

いきなり難しい質問だった。

魔術…魔法…の意味…

「う～ん…奇跡を起こすこと？」

「まぁ、間違いじゃないよ」

「その…正解は？」

「人の欲望だよ」

朝輝が少しニヤリとして、椅子から背を離してテーブルに肘を付いた。

「…欲望」

「そう。欲望。不老長寿、不老不死になりたい、金持ちになりたい、空を飛びたい、世界を征服したい、誰かを殺したい、誰かを蘇らせたい、美しくなりたい、尊敬されたい、力が欲しい。この世の真理を得たい。…それを叶えんとする為に…その欲望を満たす為に生み出されたのが魔術だよ」

「じゃあ本物の魔術って、なにが出来るの？」

「う～ん…魔術って一口に言っても沢山種類があるからね。出来ることより、出来ないことを言った方が分かりやすいかも」

朝食の時に、何故か沙也香に向かって勝ち誇った顔をしていた結が、子猫の姿になって朝輝の膝にちょこんと乗って来た。

テーブルの食器を、白雪が手際よく片付けてゆく。

「じゃあ、魔術で出来ないことって…何？」

「大ざっぱに言えば、完全に人を蘇らせること、神になること、無から何かを生み出すこと、かな」

まぁ、細かいのは沢山有るけどね。

「完全にってことは…不完全なら可能なの？」

「例えば、死霊術（ネクロマンシー）って魔術系統があるんだけど、あれはある意味死者を蘇らせるモノかな。レベルが高い死霊術師だと、死体に肉体を失った他人の霊魂を込めて動かすってのがあるんだよ。これは不完全な蘇りかな」

「ふぅ～ん…」

なんか怖くなってきた。

「まぁ、不老長寿…半永久的に生きることは出来るよ？」

「あっ！もしかしてそれって賢者の石！？」

某ファンタジー映画で得た知識であったが、今まで沙也香にとって魔術とはそのくらいのものであった。

「賢者の石は“まだ”ないよ」

「えぇ～…ないんだ」

現実を知り、ちょっとがっかりした沙也香であった。

「じゃあ、なにで不老長寿になるの？」

「吸血鬼になること、かな」

一瞬、沙也香の心臓が跳ねた。

吸血鬼ってホントにいるんだ！！

会ってみたいの半分、怖いの半分である。

「朝輝君は会ったことあるの？」

「勿論あるよ」

「どんな感じなの？」

「人と変わらないよ。血が必要で、かなりの長生きで、スッゴい頑丈で身体能力が高いってこと以外はね」

「やっぱりニンニクとか聖水とか十字架とか苦手？」

「いや、因みに太陽も大丈夫だし、杭を心臓に刺せば死ぬってのは、吸血鬼だろうが人間だろうが同じだしね」

「へえ～。吸血鬼になるって、やっぱり咬まれるとなるのかな？」

「ある意味逆だね。人間が吸血鬼の血液を摂取すると吸血鬼になる。

それと今は新しい吸血鬼を作り出すことは禁じられてる」
最後に、案外近くにいたりするもんだよと言ってニヤリとした朝輝であった。
「さぁ、問答はこれくらいにして、早速テストかな」
「えっ！？テスト！？私まだなにも…！！」
いきなりのテスト宣言で慌てた沙也香であった。
学生にとって突然のテスト宣言は死刑宣言に等しいのであるから。
「テストって言っても、勉強のテストじゃなくて、九条さんの適性を調べたりするテストだから大丈夫だよ」
椅子から立ち上がりながら朝輝が言う。
「あぁ…良かった…」
朝輝が立ち上がったせいで下にずり落ちた結が、朝輝の足元でみぃ～みぃ～と不満を述べていた。
◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇
「朝輝様」
朝輝邸の地下である。
あの後3人は地下に移動し、さっそく沙也香のテストを開始したのだ。

地下がある家は初めてな沙也香であったが、朝輝邸の地下のイメージは思っていた地下のと合っているようないないような…。そこは、綺麗な普通の家の部分と、映画で見た地下牢のような石造りの冷たく武骨な空間に別れていた。

そこに行くには、朝輝の部屋からしか行けないらしい。

三階にある朝輝の部屋の寝室にある隠し扉を通ると、なんとドア１枚で直接地下に繋がっている。

沙也香がハッキリと魔術を目の当たりにした瞬間であった。

「沙也香様の適性がわかりました。属性は水、適合魔術はルーンです」

何やら椅子に座らされ、白雪に良くわからないことをいくつかされていた沙也香であったが、どうやら結果がでたらしい。

ルーンとか聞いてもまったくわからない沙也香。

この部屋はこのイス以外に何もなく、石の床に白い天井と白い床というかなり殺風景なもので、なぜかその殺風景さが、沙也香には非日常的な空間に思えた。

朝輝はと言うと、白い壁にもたれかかってケータイなんかいじっている。

ここは地下でも電波が良いらしい。

シュカッ

と言う音を立て、朝輝がスライド式ケータイを閉じた。

「ルーンか。まぁ、それなら僕にも教えられる」

ケータイをポケットに仕舞いながら朝輝が壁から背中を離す。

「ルーン…って、何？」

聞き慣れない単語なのは仕方のないことではあるが、なんとなく宿題を忘れてしまったようなちょっとした恥ずかしさを感じつつ、沙也香が聞いた。

「ルーンってのは北欧発祥の文字でね、１つ１つが複数の意味と力を持ってるんだよ。だから今から九条さんがするお勉強は、ルーンの意味を全部覚えて使いこなすことだね」

暗記が苦手な沙也香は少し手に汗をかいてきた。

更に朝輝が、

「まぁ、漢文の重要漢字と同じように覚えれば大丈夫だよ」

漢文が苦手な沙也香に余計な追い討ちをかけたのであった。

「がっ、頑張りますッ！！」

これより沙也香の魔術生活が始まる。

第6節　勉強開始（後書き）

む～…魔術って難しい

第7節　相棒選び（前書き）

上手くかけているでしょうか…？

第7節　相棒選び

沙也香のお勉強が始まって3日が経った。

「よし、ルーンの意味は完璧に覚えたね」

暗記モノが苦手だった沙也香であったが、朝輝と白雪に徹底的にアシストされ、なんとかルーンの形と意味が一致するようになった。

「うん、意味はＯＫ」

只今午後3時をちょっとすぎた頃。

外は夏の日差しでアツアツに焼かれているが、朝輝邸の図書室は程よく涼やかな冷房に、柔らかな紙の香りが漂い、とても快適な空間である。

「じゃあ次のステップ」

そう言って朝輝が、テーブルの皿からシュークリームを1つ取り上げた。

「次のステップ…。何するの？」

4日間ずっと一緒にいたおかげで、沙也香は朝輝と普通に会話出来るようになった。

「九条さんは力を手に入れ、そして知識を手に入れた。だから次はその力で、覚えた知識を生かす訓練だよ。その逆とも言えるけどね」

「は、はぁ…」

「ちょうど、生きの良いピチピチしたのが手に入ったしね」

「ピチピチ…？」

「まぁ、いずれわかるよ。九条さんは汚れても良い服に着替えて僕の部屋に来て」

生きの良いピチピチ…汚れても良い服…

魔法を使って魚でも捌くのかな？

包丁ですら魚を捌いたことがない沙也香は、良く分からないまま自室へ戻った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

汚れてもいい服（部屋に戻ったら既に用意されていた黒いジャージ）に着替え、沙也香は朝輝の部屋に向かった。

部屋に入るとすぐに、待っていた朝輝がソファーから立ち上がり、じゃあ行こうかと沙也香を促した。

前回と同じように、朝輝の寝室にある隠し扉から地下へ行く。

「お魚を捌くんですか？」

沙也香が、すぐ後ろを歩いていた白雪に聞いた。

「ある意味、半分あっています」

沙也香よりずっと高い位置から白雪が相変わらず感情のうかがえない表情と声で言う。

「じゃあまず九条さんの相棒を決めないとね」

「へっ？」

前回立ち入らなかった、廊下の一番奥の扉のノブに手をかけて、朝輝が振り返った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「う、うわぁ…スゴい…」

その扉の中は、沙也香にとってはかなり異質なモノであった。なんと言うか…

「博物館みたい…」

沙也香は思わず口にしたが、その部屋は博物館の1ブースと言っても良い内容だった。

そこに並ぶのは、剣、斧、槍、鎌、鎖、ハンマー、刀、ナイフ、鞭、その他見たことのないものだが、残酷な用途であることが一目でわかる武器達である。

「さて、九条さんにあった武器はどれかな」

そう言って朝輝が部屋を見回していた。

「と、朝輝君!?私、武器なんか使い方わかんないし、筋力もそんなに…!」

「うん、もちろんそれも考慮するよ?」

「武器って…持たなきゃならないの?」

沙也香の問いかけに、手にした剣で空想の敵と戦っていた朝輝が振り返った。

「ん?あぁ、相棒となる武器を選ぶのは魔術師になる通過儀式みたいなもんだよ。魔術を使うにはなにかしら道具が必要だからね。まぁ、必要ないものもあるけど、ルーンなんかは特に、ルーンを刻んでおくものが必要だからね」

例えば、と言って朝輝が一振りの剣を手に取った。

「これ、刀身に刻んであるルーンは?」

と、朝輝がちょっとした問題を出した。

「えっと…それはケイナズ、かな」

「正解。じゃあ意味は?」

「メインの意味は、松明」

お見事。

と言って朝輝が微笑み、沙也香は嬉しくて顔が熱くなった。

なんとなく恥ずかしいので、それがなるべく表情に出ないように頑張る沙也香。

「つまり、この剣の特性は火ってこと」

「私は確か水とかだったような…」

「だからと言って火が使えないわけじゃないよ？水と相性が良いだけ。つまり、他の属性より水を操り安いってこと」

「ふ、ふぅ～ん」

自分にそんな属性があったなんて…

「じゃあ、探そうか。九条さんの相棒を」

それからルーンの刻まれた数種類の武器を試し、沙也香はすっかり腕が痛くなっていたが、朝輝はと言うと、

「これなんか似合いそう」

…ここはデパートの試着室ですか？

沙也香はそう思っていたが、朝輝にしばらく好きなようにさせていた。

「やっぱダメだな。どれも九条さんには扱いきれないか…」

しばらくすると、朝輝がなんかしょんぼりし始めていた。ここにあるのは元々、朝輝が振り回す為に集めたモノであって、なかなか女の子に扱いきれるものがなかったのだ。

「朝輝様。アレはいかがです？」

そんな朝輝に、ずっと部屋の入口に彫像のように立っていた白雪が声をかけた。

「あれ？あっ、あーあれね。ハイハイ」

そういって朝輝が武器が並ぶ棚の上をゴソゴソし始めた。

「あったあった。完全に忘れてたね」

そう言う朝輝の手には、直径３、４０センチ程の木の箱が抱えられていた。

「まさしく九条さん向けだ」

その箱をトンと台に置き、朝輝が蓋を開けた。

そこに有ったものは…

「えっ…これのどこが私向けなの朝輝君！？」

「剣や槍のように振り回す必要も、斧のように力が必要なわけでもない。必要なのは、この中に刻まれたルーンを正しく発動させることと、しっかり狙って引き金を引くことだけ。まさしく九条さん向け！！」

そう言って朝輝が差し出して来たのは、黒光りする、ハリウッド映画でも仁侠映画でも目にするアレであった。

「拳銃なんて…使えないよぅ…」

確かにこの部屋にあるものは全て物騒だ。
しかしこれだけは趣が異なっていた。
ともすれば骨董品のような剣などと比べると、やはり現実的で、１番身近に有るように感じる。
「大丈夫だよ九条さん。さっき言ったように、これは普通の弾丸を打ち出す銃じゃないから」
「弾にルーンを刻むの？」
疑問ばかりの沙也香である。
「惜しい！これは中に既にルーンが刻んであるんだ。だから九条さんはそのルーンに呪力を通し、発動させて、ルーンの効果を撃ち出すんだよ」
ただし、
と朝輝が付け加える。
「それには対価が必要なんだ」
「対価？」
「そう」
言って朝輝はカシュッっとマガジンを取り出す。

「ここ、本来は弾丸を込める所なんだけど…ほら、ガラスの管が入ってるでしょ？ここに九条さんの血を入れるんだよ。つまりこれを使う対価は九条さんの血液」

「注射は嫌です」

恐ろしいコトを聞いて、即否定した沙也香であったが、

「大丈夫。これは特殊でね、このガラス管の口に肌を押し付けるだけで、なんの痛みも傷もなく血を吸い取ってくれるんだよ」

なぜかちょっと興奮気味の朝輝であった。

「でも…」

なにか否定しなくてはならない気になっている沙也香。

「大丈夫。今からちゃんと使い方教えてあげるから。九条さんにも、もしもの時に自分の身を守れるようになって欲しいんだ」

いつになく真剣に朝輝が言う。

「わ…わかった。頑張ります」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

それからの授業は沙也香にとって何故か簡単であった。

内容は、呪力の制御。

沙也香の場合、突然強力なパワーを身につけてしまったので、案外朝輝もヒヤヒヤしていたらしいが、ルーンを覚えるより容易かった。

イメージとしては、体中に川があるイメージだ。

その流れを把握し、好きなように収束させたり、霧散させたりと言った感じ。

「九条さん。凄いね…並みの魔術師が数年かかってやることをたった1時間の間に…」

朝輝がかなり驚いた顔をしていたが、沙也香には簡単だったのだから仕方ない。

なんと言うか、あの日から、体の中に何かモヤモヤした固まりがあるような違和感があったのだ。

で、今日呪力の制御を習ってみたら、そのモヤモヤの固まりを、自在に動かせるようになった。

沙也香にとってはただそれだけのことであったのだ。

「あ、ちなみにその銃は“グロック”って銃だよ。かなりの部分がプラスチックで出来てるから普通の銃より軽いんだ」

「へぇ〜」

そい言って、自分の相棒をしげしげと眺める。

黒光りするボディは、最初は怖かったが、今はなんとなく頼もしく

感じる。

「じゃあ実際に撃ってみようか」

そう言って朝輝が隣りの部屋に沙也香を誘った。

第7節　相棒選び（後書き）

もう少し話が進んだら挿し絵とか欲しいです…（笑）

第8節　最終試験と最初の試練（前書き）

血なまぐさくなってまいりましたよ

第8節　最終試験と最初の試練

「じゃあ実際に魔術を使ってみようか」

朝輝がそう言って、人差し指を立てた。

「え…もう？」

「グリモワとか使ったお勉強より実際に魔術使ったほうが楽しいでしょ？」

そんな2人がいるのは武器庫の隣の、朝輝曰わく“トレーニングルーム”らしい。

しかし…

「ここ…ちょっと怖い」

「そう？」

「うん…」

朝輝は馴れている、と言うか、ここを作らせた本人だから何ともないのだが、実際異様な空間ではあった。

床も壁も天井も同じ材質の石造りで、ライトも少なく薄暗い、小体育館くらいの広さの部屋。

ただそれだけの部屋である。

「お待たせしました」

そういって、無表情な白雪が武器庫の方から入って来た。

その手は、大小様々な大量のダンボールがこれでもかとばかりに乗せられた荷台を押している。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そしてその後しばらく沙也香は、朝輝に指導されながら部屋の端に置いたダンボールに向けて、ルーンを撃ち込む練習をしていた。

「す…スゴいッ！私、魔法使ってる！」

習得した沙也香のルーンによって、ダンボールは惨たらしいほどグチャグチャのゴミになっている。

「よし、使い方は覚えたね」

「うん！！」

魔法が使えるって楽しい！！

沙也香は有頂天になっていたが、それも一時のことであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「じゃあ次は動く的を撃ってみようか」

飲み込みの早い生徒に満足しながら朝輝が言う。

「動く的？」

なんだろう…

クレー射撃みたいな感じかな？

「まぁ、このために着替えてもらったんだけどね」

ちょっと待ってて。

そう言って朝輝が武器庫の方に行った。

すぐに戻って来た朝輝の手にはシンプルな武器がにぎられていた。

１２０センチ程の六角形の黒い棒である。

「それなにに使うの？」

素朴な疑問であったが、朝輝はまぁ直ぐにわかるよ、としか言ってくれなかった。

「黒江さん。お願いします」

朝輝が、その棒を杖みたいに床について白雪を呼ばう。

「かしこまりました」

そう言って白雪が運んで来たのはかなり大きな代物であった。

縦横２メートル程の箱状の物だったが、黒い布に覆われていて中身はわからない。かなり怪しげである。

「あれ…なに？」
ダンボールをどかした位置に置かれた物体に釘付けになりながら朝輝に問う。
「九条さんの最終試験だよ」
そう答えた朝輝が、黒い六角形の棒を持って箱に近づいて行く。
そして　―
バリィーン！！
朝輝が振り上げた棒を箱に叩きつけた。
ドパッ　―
っと、割れた箱の中から水が溢れ出し、朝輝が素早く飛び退いた。
「さぁ、試験開始」
わけがわからなくなって呆然としている沙也香に朝輝が言う。
「え…な、なに！？」
直後に沙也香がおののいたのは、箱を覆っていた黒い布の中で何かが蠢いていたからであった。
「ほら、九条さん構えて」
朝輝がいつもの調子で促す。

「ギッ…ギィィィ」
突如布の中から響いたおぞましい声に、びくっとした沙也香は思わず銃を落っことしそうになった。
「な、なんなの！？」
もぞもぞと蠢いていた布が、唐突に外された。
そこにいたのは…
「…！？」
なんだアレは…
とても現実とは思えない。
ヌメついたウロコに覆われた深緑色の体表。
首がなく、頭から肩までが滑らかに繋がっている。
そしてその間には、エラとおぼしき裂け目。
人間のように二足歩行しているものの、その手足の指の間には薄い膜　―水掻き―　がある。
身長はそれほど高くなく沙也香と同じくらい。
頭から背中にかけてトゲのあるヒレがはえていた。
「と、朝輝君！アレ！？」
「半魚人だよ？昨日、隅田川で捕まったんだって」
あんなものが都内の川にいたなんてとてもじゃないが信じられない。

「臆病な種類だからね。まぁ、だからこそ追い詰められたら狂暴化するんだけど」

朝輝が呑気にそんなこと言っていると、周りを確認し、逃げ場がないと知った半魚がこちらを威嚇し始めた。

「ギッギッギッ」

不快な鳴き声と共に、腥い臭いも漂って来た。

銃を構えたまま、思わず一歩後ろに下がる沙也香。

「よく狙って」

「こっ、殺しちゃうの…？」

「そのために連れて来たんだよ？それに、実戦で使えなきゃ意味ないでしょ？やらなきゃやられる。今九条さんがいるのはそういう世界なんだよ」

沙也香は初めて意識した。

自分の覚えたモノが、誰かを傷つけ殺すモノだということを。

「ギッギッギッ」

不快な鳴き声を発しながら、半魚が飛びかかるような前傾姿勢をとる。

「ほら、九条さん。ケイナズでもハガラズでもいいから撃たなきゃ」

朝輝は口にアメ玉を放り込みながら言う。
とうとう沙也香は震えだした。
怖かった。
未知のバケモノと突然対峙させられ、それを平然と殺せと言われた…
「怖いよぉ…」
「恐れるな、恐れが死を呼ぶ」
初めて朝輝に強い口調で言われたが、怖くて怖くてしかたない。
びちゃびちゃっ
と、とうとう半魚が沙也香目掛けて、濡れた足音を響かせながら飛びかかって来た。
「ひっ…！？」
更に一歩、恐怖で下がった所で沙也香は震える腕で銃を構えながら尻餅をついた。
あぁ…私、もう…
絶望し、沙也香は自分の脚を抱え、膝小僧の間に頭をうずめる。
しかし、
ゴウッ！！

何か鈍いモノが風を切り、
ドガッ！！
何かが肉を殴打した。
「ギガォッ！？」
悲痛な叫びが響く。
数秒遅れて、ドシャっと何かが墜落した、濡れた音が聞こえてきた。
◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇
「朝輝君…？」
うずくまっていた沙也香は、不意に温かい朝輝の手に手を握られた。
「ごめんね九条さん…」
沙也香が顔を上げると朝輝が沙也香の前に跪いていた。
「…いきなり段階を飛ばしすぎたみたいだ」
まだ震えが止まらない。
「…あ…ぁ」
朝輝の傍らには、末端に何かヌメリが付着した禍々しい黒い六角形の棒が置いてあった。

ビチビチ

と、朝輝の後ろの方からなにか異音が聞こえてくる。

「ぁ…う」

見てしまった。

それは無惨に頭部を破壊され、ビクビクと痙攣を繰り返す半魚人の骸。

それを行ったのは…

「九条さん」

7キロもある鉄棒を振り回し、自衛のために飛びかかって来た半魚人を容赦なく滅殺した朝輝が言う。

「ゆっくりやっていこう。時間はあるから。さぁ、立って。部屋に戻ろう。美味しい紅茶とケーキがあるから」

朝輝は怯えている沙也香の手を握り、優しく立たせた。

「もう、大丈夫だよ。九条さんのことは僕が守から…」

しかし、そうは言っても沙也香も戦わなければならないのだ。

朝輝はどうしようもない焦燥感にさいなまれていた。

早くこの少女が、己の身を守れるくらいには戦えるようになってもらわなければ…

敵からも…そしてこの自分からも。

第3章第1節　ゲームの始まり（前書き）

>i6050|590<

第3章第1節　ゲームの始まり

――――薄暗く、埃とカビと、染み付いた古い血の匂いがする。そんなおどろおどろしい部屋。その四隅から伸びる4本の鎖で四肢を拘束され、気を失った黒髪の少年が、冷たく硬い石の床に死んだ様にうつ伏せで倒れていた。

冷たい床に突っ伏している少年は、左の二の腕に着けた、装飾のないツルリとした銀の腕輪以外、上半身に何も身につけていない。

しかしその滑らかな裸の背中、そこには何か記号のような文字のようなものが7ヶ所刻まれていた。

それは見る者が見れば震えあがる死の束縛であった。

刻まれたばかりの刻印は禍々しく少年の背を汚し、黒々と少年を蝕んだ。

しかし、この少年の犯した罪に対してはこの罰は軽すぎると言っても過言ではないのである。

普通なら即死刑になってもおかしくない罪を犯した少年は7つの死の刻印で拘束された。

ただそれだけであった。

細々とした規制はあるが、とるに足りないモノばかりである。

もちろん、それには裏がある。

この少年は、連盟に於いて重要な座にある上に、非常に貴重なサンプルでもあるのだ。

刻印の少年は魔術史上、過去たった1人、伝説の魔術師しか成し遂

げ得なかった偉業を成し遂げたのである。
伝説の魔術師の名は“マーリン”またの名を“ガンダルフ”。
最期こそ哀れな末路を辿った魔術師であったが、力は本物であった。

そんな彼は魔術史上で唯一ドラゴンに変化し、その力をふるうことが出来る魔術師であったのである。
この少年が成し遂げるまでは。
◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇
「―　どう？黒江さん」
服の裾を捲り揚げ、真堂朝輝が背中を晒していた。
「…もう大分薄くなっています、後少しで消えるかと」
と、白雪は何時もの感情を表さない声で答える。
「良かった。これでやっと九条さんをまともに護れるよ」
「朝輝くん…」
沙也香が少し心配そうな声をあげたのは、朝輝の滑らかな背中に刻まれた一見タトゥーのようにみえる黒い記号が、魔術素人の沙也香が見ても禍々しくて不気味なモノであったからである。
「…前にも言ったけど、ちょっとした事件を起こしてね。謹慎のための拘束なんだよ」
拘束について事前に少し話を聞いていた沙也香だったが、実際に見

せられるまで、朝輝が謹慎を食らうような事件を起こすなど想像できていなかった。

「ちゃんと…僕が九条さんを護るからね」

窓から差し込む逆光の中、服の裾を下ろした朝輝が振り返らずに言う。

その時、朝輝がどんな表情だったか沙也香には見えなかったが、声から朝輝の確固たる思いが伝わってきた。

「う、うん！！ありがとう。私も魔法のお勉強頑張るから！！」

これが今、沙也香が出来る精一杯の返事であった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「妾（わらわ）は村木屋のアンパンが食べたい！！」

その日の夕食後の、いつものような穏やかな時間であった。

浴衣を着たこの家のワガママ姫が、ソファーに身を沈めてＴＶを見ている朝輝におねだりをしていた。

「あー、そういえば最近食べてないね。」

食後だというのに、油したたる肉をジュージュー焼いているグルメ番組に釘付けになりながらも、本日３つ目のプリン（１つ３０００円もする）をスプーンですくっている朝輝が答える。

「じゃあ明日のおやつはアンパンにしようか」

（お腹いっぱい過ぎて苦しいのにプリンの匂いと肉焼き音のコンボが…うぇぅ）

沙也香はこの2人の食欲には着いて行けそうになかった。

「朝輝様、食べ過ぎですから」

「あッ！？あと1つで最後にするからお願い没収しないでぇぇぇ！！」

朝輝の断末魔もスルーし、白雪が無慈悲にプリンを没収するのであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

―　次の日、約束通りアンパンを買いに行くことになった。ずっと2人とも家に籠もりきりだったので、朝輝と沙也香の気分転換も兼ねての　お出かけである。

「じゃあ行って来るから」

そう行って朝輝が玄関のドアノブに手をかけた。

「本当に私がついて行かなくてよろしいのですか？」

白雪が少し心配するように言った。

珍しく感情らしきものが見えなくもない。

「電車の切符くらい自分で買えるから大丈夫だよ」

「……私が申しているのは―」

「わかってるよ白雪さん。大丈夫だから」

「…承知しました」

（…うーんと）

どうすればいいのかな？

なんか置いてきぼりにされた気分の沙也香であった。

幸いにも今、結は陽向でお昼寝中なので気付かれずに2人で出掛ける。

……帰った時が怖いが。

「それではお気を付けて…」

白雪がキレイな礼で2人を送る。

初めての朝輝と2人っきりのお出かけ。

久しぶりの外ということもあり、沙也香は軽くハイになっていた。

それは朝輝も同じようなもので、もうすぐ忌まわしき呪縛から解放されるということもあり、気が緩んでしまっていた…

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

地下鉄で十数分。

2人は夏の太陽が照りつける銀座を歩いていた。

さすがに人が多い。
「暑いね～。そうだ！！ジェラート食べよう」
「あ、あはははは…」
たわいないおしゃべりだが、朝輝たちは目的地である村木屋に着くまでに既にかなりの買い食いをしていた。
（もしかして黒江さんが心配してたのって、これ…？）
朝輝家で暮らし始めて気づいたが、朝輝の食に対する執着…特に甘いものに対する執着にはハンパないものがある。
「私はもうお腹いっぱいかも…」
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
銀座の中央通り。
2人はその通り沿いにある目的地、村木屋に道草しながらやっと到着した。
「いやぁ、さすが元祖アンパンの店。いつきても繁盛してるな」
「へぇ～。ここが元祖アンパンのお店なんだ。初めて着た」
店の中にはかぐわしい焼きたてのパンの香りが漂い、人々を誘惑し財布の紐を緩ませていた。
そんな中、さんざん買い食いしたにも関わらず誘惑されている人間がここにも1人。

「ふはぁ～…いい香りだ…素晴らしい。買い占めちゃいたい」

朝輝の場合ホントに買い占めかねないから困る。

その時、朝輝に気付いた店員が、あっという顔をしたのを朝輝と一緒にパンを買う列に並んでいた沙也香がみた。

その店員は慌てた様子で厨房に飛び込んでゆく。

どうしたんだろうかと考えている内にアンパンが大量に並んでいるレジ前にたどり着いた。
このお店はアンパンに限ってはレジにたどり着いてからアンパンの種類と個数を注文するのである。
そして、沙也香はさっきの店員さんがあっ、という顔をした理由がわかった。

「えーと、とりあえず酒種アンパン有るだけ全部と、あとは全種類１０個ずつ」

は？　そう思ったのは沙也香とレジのバイト大学生だけではなかったらしく、左右にいたお客さんまで朝輝に振り向いた。
そして裏からはさっきの店員さんと多分店長らしき人が出てきて、遅かったか…という顔をしていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「なんか…たくさん買ったね…」

両手に２０個くらいずつのアンパンが入った袋を下げた沙也香が、更に大量のアンパンが入った袋を持った朝輝に言った。

朝輝は沙也香（女の子）に荷物を持たせたくなかったが、施されてばかりが嫌だった沙也香は荷物を持つと言って聞かなかった。

「いつもこのくらい買うよ？」

さもそれが当たり前のだというように言う朝輝。

そりゃあ店員さんも“あっ”となるわけである。

2人はなんとか人混みを掻き分けて、自動ドアから外に出た。

途端にむわっとした夏の熱気が2人を包む。

「――――ッ！？九条さん！！」

本当に突然、朝輝が叫んで沙也香を突き飛ばした。

「え…？」

わけがわからぬまま朝輝に突き飛ばされ、尻餅をついた沙也香が次の瞬間に見たものは　――――

沙也香をかばった朝輝に、何者かが細長いモノを叩きつける所であった。

もの凄い衝撃であった。

別に小柄でもない朝輝が、まるで蹴り飛ばされた空き缶のように宙を舞ったのである。

一拍遅れてドッパッァァァン！！という衝撃音が響く。

「朝輝…くん？」

コレはウソだ。コレはゲンジツじゃない。ゲンジツであってはいけない。

しかし、これは紛れもなく現実であると、夏の太陽に灼かれた熱いアスファルトに教えられる。

「朝輝くん…！？」

沙也香は立ち上がれなかった。

体に力が入らない。

「朝輝くん！！」

名を呼ぶことしかできなかった。

一方、道路に倒れた朝輝はピクリとも動かない。

「動くな。動かなければ傷付けはしない。俺の狙いはお前が持っているカケラだ」

唐突に、朝輝を殴り飛ばした襲撃者が、その一定間隔で節のある金属製の棒状武器を沙也香に突きつけて言った。

ただし、沙也香は相手がなんと言ったのか理解出来なかった。

なぜなら相手が中国語で話しかけてきたからだ。

怯えた表情のまま固まっている沙也香を見て、襲撃者は面倒臭そ

うな顔をしてチッと舌打ちをした。
「中国語がわからんか。だが俺は日本語は喋れないし、喋りたくもない」
そう中国語で言ったのは、短髪でつり目気味の、朝輝や沙也香と同年代の少年である。
「さっさとカケラを寄越せ」
言っていることはわからない。でも、沙也香が狙われる理由は1つしかない。沙也香は思わず胸元にあるカケラを服の上から握った。
「おとなしくそれを寄越せ。あんたは傷つけたくない。俺にもあんたみたいな知り合いがいるからな」
――――真堂朝輝は熱い車道の上に転がっていた。
意識が朦朧とする。多分、打たれた所の骨は砕けただろう。
しかし、打たれた背中の左側にはなんの感覚もなかった。
……甘かった。
こんな状況の時に、ましてや今の自分は魔術が使えない。
（なんて事だ…。立ち上がらなくちゃ…　九条さんを…護らなきゃ…　約束した。僕が九条さんを護ると約束した。絶対に…九条さんにはケガ1つさせない…ッ！！）
見事に“人払い”され、静まり返った銀座。
その車道に倒れた朝輝は頭を巡らせ、助けを見つけ出した。
朝輝からすぐ手の届く車道と歩道の段差の所に、ジュースの空き

缶があったのだ。
朝輝はそれに手を伸ばし、小石で表面に魔術的な記号を描く。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「　…さぁ、早く。じゃないとお前も　――――　」

言いかけて、短髪の少年が突然振り向いた。

――――その視線の先には。

「朝輝くん！？」

左腕をダラリと力なく垂らした朝輝がふらりと立ち上がる所であった。
その右手には空き缶が握られている。
フラフラしていた朝輝が、足を踏ん張り力いっぱい右腕を振るった。

「ちぃッ！！テメェが魔術を使えねぇのはわかってんだよッ！！」

襲撃者の少年は、かなりの速度で飛来した空き缶を、節のある鉄棒で打ち払う。
――――しかし
空き缶を打ち払った瞬間、ボバッッ！！　っと言う爆発音と共に空き缶が炸裂した。
「なッ！？」

炸裂した空き缶は、衝撃波と共に缶の破片を撒き散らした。
襲撃者の少年はまともに衝撃波と破片を食らって、背後の建物の

壁に叩きつけられるが、至近距離にいた沙也香には破片はおろか、衝撃波すら襲いかからなかった。

それは真堂朝輝という一流の魔術師の手腕によるものである。
しかしあくまで朝輝は魔術を使ってはいない。
今のは魔術的な意味を持つものを作り出し、魔術的な意味を持つ別のものにぶつけて反応を起こしたのである。

「貴様ァ！！」

壁に叩きつけられて数瞬後、襲撃者の少年は武器を構え直しし、車道に立つ真堂朝輝に突撃する。

避ける体力もない朝輝は何の武器もなく、ただただ裸の右の拳を握る。

「死ねッ！！」

節のある金属棒が振りかぶられ、朝輝の頭を割らんとする。
———しかし

唐突に少年が何かに気が付き回避行動をとる。
直後、少年がいた所のコンクリートが砕けた散った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6757i/

ChocolateDragon

2010年10月9日02時43分発行